

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

7 回目

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

これまでのスポーツアニメと「ひゃくえむ」が異なる点は、100m 走という競技を通じて「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という実存的な問いに踏み込む作品であるということである。この作品は父性の導きも母性的な抱えもない裸の個として、生きることの意味をどう掴み取るのかが問われている。

Ⅱ. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

きょうだいトラウマにおけるトガシと小宮

トガシと小宮は走ることを通じて、ある種きょうだいのような関係になり、互いの存在によって走るものの質が変わり始めた。トガシにとっては意味のなかった走りに初めて他者が介在し、小宮にとっては孤独な自己処方ではなかった走りが「誰かと共にある」営みへと変わり始める。しかし小宮の突然の転校により、きょうだい葛藤に向き合う機会すらないまま関係は断ち切れ、それぞれに処理されなかった喪失と恐れが残った。その二人が高校生になり、インターハイの決勝で再び同じ舞台に立つ。

Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮について考える

高校に入り走ることをやめていたトガシを変えたのは、浅草葵の存在であった。葵は速さや結果ではなく、ただ「100m を走るトガシ」という存在を受け入れた。この受け入れがトガシにとっての抱える環境となり、走ることがただ無心に没頭できる「遊び」——ウィニコットのいう潜在空間——になった。トガシは速さを取り戻し、エディプスコンプレックスに押し潰されていた仁神も走る喜びを見出していく。

一方の小宮は、中学時代の怪我が癒えても全力で走れないでいた。転機となったのが財津との出会いである。財津に新たな父性的対象を見出した小宮は「日本記録を塗り替える」と宣言し、記録は飛躍的に伸びていく。しかし小宮は潜在空間を持たないまま、記録の世界という自己愛的な殻に閉じこもり、孤立を深めていった。

インターハイの決勝、雨の中で二人は再会する。晴れやかな舞台ではなく雨の中での再会が、処理されなかった喪失の重さを暗示している。決勝でトガシは小宮に敗れるが、走り終えた後に小宮が告げたのは「走り方、変わったね」という失望の言葉であった。小宮はトガシを父性的な理想化された対象として追いかけてきたが、潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、もはや小宮が追い求めていた「あのトガシ」ではなくなっていた。小宮はトガシに勝ったが、追い越すべき理想化された対象がもうそこにはいない以上、勝利は空虚であった。「100m を誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼそのものが、こ

の瞬間揺らぎ始めるのである。

IV. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

オデッセイ世代（新成人期）の理解

1. 定義と概念の変遷

- **呼称:** 新成人期 (Emerging Adulthood)、オデッセイ (さまよい) の年月
- **オデッセイとは:** 「放浪と冒険の長い旅」「知的な探求」の意味。古代ギリシャの詩人ホメロスによる長編叙事詩『オデュッセイア』の英語読みが由来。主人公の英雄オデュッセウスが、トロイア戦争の後に故郷へ帰るまでの「10 年間に及ぶ過酷な冒険の旅」が描かれている。
- **年齢層:** 主に 21 歳から 30 歳まで
- **歴史的背景:**
 - 1962 年：ブロスが「後青年期」として先見的に概念化。
 - 2000 年：ジェームズ・アーネットが「新成人期」として正式に命名・体系化。
 - 2007 年：デイヴィッド・ブルックスの『ニューヨーク・タイムズ』論説により「オデッセイの年月」として一般に普及。

2. 時代的背景と「流動性」

- **成人への移行の先送り:** 教育、経済的自立、結婚、親になること等の伝統的指標が 30 代まで先送りされている。
- **統一テーマ「流動性」:** 職業、居住地、恋愛、目標が確定せず、常に模索と変化が続く状態。

3. この年代の 5 つの心理的特徴

1. **アイデンティティの探求:** 「自分は何者か」を模索する。

2. **不安定さ**: 生活環境や関係が頻繁に変化する。
3. **自己充足 (Self-focus)**: 他者への責任 (家族等) を負う前の準備期間。
4. **「狭間」の感覚**: 青年でも成人でもないという不安定なアイデンティティ。
5. **可能性への期待**: 将来の選択肢が開かれているという希望。

4. 発達心理学的な意義

- **「再中心化 (Recentring)」のプロセス**: 一度分散や脱却 (脱中心化) した機能や認識が、新たな形や別次元で再び特定の中心に集まる現象やプロセス
 - 青年期の成功体験が成人世界で通用しないことへの挫折・幻滅を経て、自分を再定義する時期。(脱中心化)
 - 単なる迷走ではなく、成人社会に適応するための**不可欠な発達課題**である。
- **現代社会の必然**: 成人への道のりが複雑化した現代において、若者が主体的に人生を構築するために必要な「さまよいの 10 年間」であると捉える。

トガシの「あれから 10 年」は、オデッセイ世代の発達課題という観点から読み解くことができる。青年期から成人世界にかけての挫折と幻滅を経て、自分を再定義する「再中心化」のプロセスを辿る時期である。

トガシはインターハイ決勝で小宮に敗れ、「走り方、変わったね」と失望を告げられた。かつてのきょうだいから走りの質そのものを否定されたこの体験を引きずるように、実業団の陸上部に所属し続けていたが、成績は振るわず契約更新もままならない状況であった。本来この時期はアイデンティティの探求と可能性への期待を伴う創造的なさまよいの時間であるはずだが、トガシのさまよいには探求も期待もない。「明日生きるために死んでいた」と後に語るように、走る意味を見失ったまま惰性の中に留まっている。インターハイでの敗北と子ども時代の処理されなかった喪失が重なり、走ることを問い直す力を奪い続けていたのである。トガシの 10 年間は、オデッセイ世代としての発達課題に取り組みなかった停滞の時間であった。しかし後輩の樺木の忠告、海堂との出会い、そして日本選手権への決意が、ようやくトガシにとっての再中心化の始まりとなり、「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」というアイデンティティの確立へとつながっていく。

1) 登場人物紹介

樺木（かばき）：トガシが所属する実業団陸上部の後輩。全盛期のトガシの走りを知っており、かつてのトガシに憧れを抱いている。契約更新に安堵するトガシに「変わった」と告げ、その言葉がトガシの中で沈んでいたものを揺さぶることになる。

海堂（かいどう）：日本陸上界のトップスプリンターの一人。天性の短距離の才能を持ち、高校時代にはインターハイ優勝を狙える位置にいたが、15歳の財津の出現以来、15年にわたり万年2位の現実を突きつけられ続けている。しかしその現実を知り尽くした上で、なお「次こそ自分が勝つ」と信じられる人物である。

森川（もりかわ）：インターハイ優勝の実績を持つ選手。大会前にトガシに握手を求め、トガシに憧れて陸上を始めたと語る。

2) 「変わった」という言葉の反復

インターハイから10年、トガシは実業団で陸上を続けていた。しかし成績はパッとせず、いつ契約を切られてもおかしくない状況にある。しかしそこに切迫感はない。戦いから身をききつつあるかのような柔和さ。それは様々な喪失と現実を経てきたトガシのある種の成熟とも見える。クラインの言う抑うつポジション、すなわち万能感を手放し、現実の限界を受け入れて生きる姿勢が、そこにはあるようにも感じられる。

しかし後輩の樺木は、契約更新に安堵するトガシに「変わった」と告げる。かつてインターハイで小宮が「走り方、変わったね」と失望を込めて言ったのと同じ言葉が、ここで再び反復される。樺木の言葉は、全盛期のトガシの走りを知る者からの「あの頃に戻ってほしい」という願いであり、今のトガシへの落胆でもある。成熟した抑うつポジションに見えていたものは、本当に成熟であったのか。それとも走る意味を見失った諦めではなかったか。樺木の言葉は、穏やかさの下に埋もれていたトガシの中の何かに火をつけるのである。

その後、トガシは一人残って黙々と練習を続けるが、次の大会でも振るわず平凡な成績で終わってしまう。

そこで変化を求めトガシは陸上部親睦会に参加し、海堂に会いに行く

3) 海堂の言葉と潜在空間の言語化

企業のマネージャーに誘われた親睦会の場で、トガシは海堂と出会う。走る意味を見失っていたトガシに、海堂は自らの経験を語り始める。

海堂は自身の才能を自負している。しかし高校3年の夏、15歳の財津が現れて以来、15

年にわたり「一步先に常にあいつがいる現実」を見せられ続けてきた。万年2位と呼ばれる現実。老いていく現実。若手が台頭してくる現実。海堂は現実の過酷さをすべて知り尽くしている。しかし海堂は言う。

「不思議なことに、今の俺は、次こそ自分が勝つと信じきれている」

そしてその理由を問うトガシに、海堂はこう答える。

「現実逃避できるからだ」

「俺の勝利が非現実的なら、俺は全力で現実から逃避する。現実逃避は、俺自身への期待だ。俺を俺が諦めていないという——姿勢だ」

「たとえ周りがどんな正論、洞察、真理、啓蒙を振りかざそうと、俺は俺を認める。それこそが俺の使命、仕事、生きる意味、走る理由」

「いいかトガシ、何のために走っているのか、分かってりゃ、現実なんていくらでも逃避できる」

この海堂の言葉は、ウィニコットの潜在空間の体験を見事に言語化したものと言える。海堂は現実を否認しているのではない。勝てない現実、老いる現実、すべてを知り尽くしている。しかし現実屈服して諦めているわけでもない。海堂は現実を完全に知った上で、現実と空想の間にある潜在空間の中に自らの居場所を作り出しているのである。

棒切れが剣ではないことを知りながら、剣として夢中で遊べる子どものように、勝てない現実を知りながら、勝つと信じて全力で走る。それは躁的防衛のような現実の否認でもなく、抑うつ的な諦めでもない。現実と空想の間にある第三の領域で、創造的に生きるということである。

そして「現実逃避は俺自身への期待だ。俺を俺が諦めていないという姿勢だ」という言葉は、潜在空間の中での遊びが単なる気晴らしではなく、自分自身との関係の核心であることを示している。自分が自分を諦めないこと。それが使命であり、生きる意味であると海堂は言い切る。

トガシにとってこの言葉は、かつて葵に抱えられる中で感覚として掴んだ潜在空間の体験が、初めて言語化された瞬間であったと考えられる。走ることにあった「遊び」の質、無心に没頭できたあの感覚。それが何であったのかが、海堂の言葉を通じて明確な形を持ち始めたのである。